

## 発音指導と発音記号：辞書使用の諸問題

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 有本 純, 河内山 真理  |
| 雑誌名 | 教育総合研究叢書 = Studies on education   |
| 号   | 12  |
| ページ | 101-112   |
| 発行年 | 2019-03-31  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000556/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000556/</a> |

## 発音指導と発音記号

### —辞書使用の諸問題—

## Relation Between Pronunciation Teaching and Phonetic Symbols:

### Some Issues of Using Dictionaries

有本 純\* 河内山 真理\*\*

Jun ARIMOTO Mari KOCHIYAMA

## 抄 録

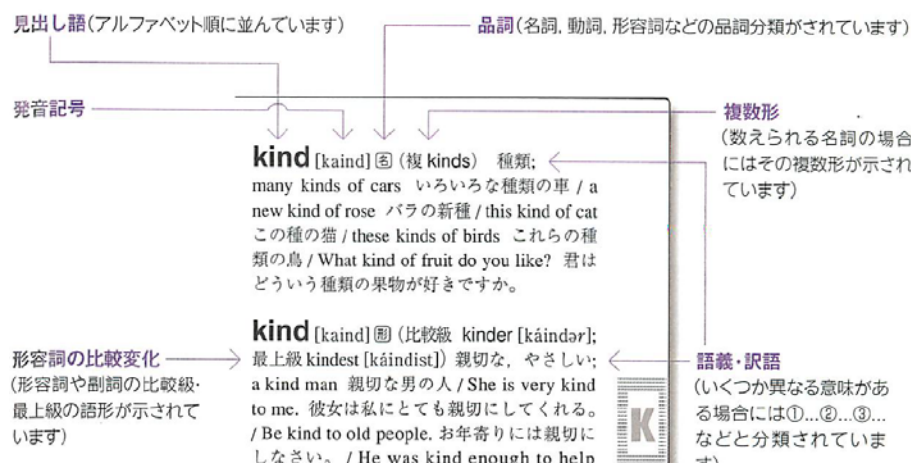
現行および2020年度から実施される中学校外国語の学習指導要領では、いずれにおいても発音記号は必須の指導事項ではなく、補助として使用できるものとされている。教科書では2年生からは発音記号が新出単語と共に記載され、英和辞典でも必ず掲載されているので、知っておく方がよい項目である。本稿では、英和辞典を5つのレベルの分類し、比較調査した結果、音声表記のバラつきや、用語の混乱などがあることを確認した。発音記号を指導する際に、学習者に混乱を招く可能性があり、辞書編纂に対しても課題があることを指摘した。

## I はじめに

英語の辞書は、英語学習にとって重要な道具であり必要な参考書という位置付けに、本研究では設定している。中学校学習指導要領においては、「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」と示されており、中学校での辞書指導を指示している。

また、中学校用の英語検定教科書においては、辞書の使い方が2年生または3年生で1ページ程度示されている。ここで、教科書に示されている辞書指導を3例提示する。

### 1) Total English 2 生徒用教科書



\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

\*\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

## 2) Total English 2 Teacher's Book

**Step 2** Aは、A～Zのアルファベットの順が順に入っているかを確認するのに適した問題である。  
Bでは、最初の文字と2番目の文字が同じであれば、さらに3番目の文字に注目するという点を確認する。

次の語をアルファベット順に並べましょう。

A. ① season ② know ③ like ④ class ⑤ sorry  
B. ① mother ② match ③ math ④ music ⑤ morning

**Step 3** A. ④→②→③→①→⑤ B. ②→③→⑤→①→④

下線部の語について、意味の違いを調べましょう。

A. ① I know the man well. ① よく、かなり：副詞  
私はその男の人をよく知っています。  
② The man is standing near a well. ② 井戸：名詞  
その男の人は井戸のそばに立っています。

## 3) Sunshine 3 Teacher's Book

### ●やってみよう

#### 1. 次の英文の下線部の意味を調べましょう。

(1) My whole family gets together on New Year's Day.

(2) Kyoko got on the bus. 乗る 集まる

(3) I caught a big fish, but it got away. 逃げる

以上の例からわかるように、僅かなページで説明されているだけで、辞書の使い方や必要性が伝わっているとは言えない現状である。

さらに、中学校段階では辞書を持っていなくても、また使用しなくても、予習や復習は教科書の巻末にある語彙リストでこと足りるように作られている。あるいは、副教材や教科書準拠の参考書等でも代用可能で、例えば熊本県では中英研が編集した『英語の基本学習』という小冊子を出版しており、単語・連語のチェックというページでは、各課の新出単語とその出現箇所での適切な意味がまとめられており、これは教科書巻末にある語彙リストとほぼ同等の内容である。

中学校段階で辞書を使わせる機会を与える必要があるにも拘わらず、実際には、Koyama (2003)やTono (2006)などで、「辞書指導は行われておらず、学習者は辞書の利用法を知らない」という指摘が見られる。中学校では英語学習に必要な辞書は「英和辞典」である。これには、紙の辞書と電子辞書の2種類があり、各々に長所と短所がある。紙の辞書の場合、2ページ見開きとなるため視覚的に全体を広く把握し易いし、安価であるが、分厚くてかさばるなどのプラス・マイナス両面で特徴が挙げられる。一方、電子辞書の場合は、モデル音声を聞くことができ、複数の辞書が格納されており、相互利用（ジャンプ機能）が可能、検索機能がある、コンパクトで持ち運びに便利など利点は多いが、高価である、電池切れになると使えないといったマイナス面もある。実際、中学生はいずれのタイプの辞書も必要性はなく、高校生になって始めて辞書を使い始めるのが一般的であろう。しかし、高校の英語授業においても辞書指導は積極的に行われていない。

## II 音声表記

中学校の英語検定教科書、教授用資料、教科書準拠の参考書などで、音声表記が異なるという問題については、河内山他（2017）で既に指摘しているが、小中学校の児童・生徒が対象と思われる入門用の英和辞典にも、独自の音声表記が多種類用いられていた。

リサーチ・クエスチョン：中学・高校生対象の英和辞典では、多様な音声表記がなされているのではないかな

日本の英和辞典を見ると、国際音声記号(IPA)を簡略化した、謂わば、日本独自のルールによる記号が使用されていたり、様々な種類のカナ表記も見られた（河内山他：2017）。比較の為に、英英辞典ではイギリス系の辞書が完全に IPA に基づいて表記されているが、アメリカ系の辞書では、アルファベットに補助記号を付けるという独特の音声表記が見られた。例えば、RHW (Random House Webster Dictionary)では、a という記号にも補助記号を付けて4通りもあるが、巻末の一覧表を参照するか、IPA との対照表を作成しないと、実際の音価を理解することは容易ではない。

アメリカ系辞書の発音表記例

|                                      |                   |
|--------------------------------------|-------------------|
| a (short a) at, hat, half, laugh     | (IPA では /æ/ で表記)  |
| ā (long a) ate, hate, rain, straight | (IPA では /eɪ/ で表記) |
| ä (broad a) father, calm             | (IPA では /ɑ:/ で表記) |
| âr air, chair, dare, wear            | (IPA では /ɛə/ で表記) |

岩井(2006)では、内外の英和辞書における単母音の音声表記を比較対照し、その異同の分析に基づいて、英語学習者にとって合理的な発音表記の体系について考察している。しかし、後述するように音量表記から脱していない点に課題が残った。

## III 辞書の音声表記

### 3.1. 分析対象となる辞書

本稿で分析対象とするのは、学習者用英和辞典であるが、これを5つのグループに分類した。1) 入門者用8種類、2) 初級者用2種類、3) 中級者用5種類、4) 上級者用3種類、そして、比較の為に5) イギリス系の英英辞典3種類を含め、合計22種類を用いた。辞書の一覧は、巻末に示している。

入門者用とは、小学生を対象としており、発音は主にカナ表記になっているか、発音記号が併記されており、かなり小型で薄い辞書である。初級者用とは、中高生の学習用であるが、発音記号とカナ表記の併記タイプが多い。中級者用とは、高いレベルの高校生から大学受験まで対応するもので、ほとんどは発音記号のみである、本体はかなり分厚くなっている。上級者用とは、大学以上の専門的なレベルで用いられる辞書である。本稿で扱う英英辞典は、英語を外国語として学習する人を対象に作られた辞書である。

最近、辞書の種類が増大しており、例えば「アンカー」という名称の辞書は6種類もある。キャラクターが付いた「ミッキー・ジュニアアンカー英和・和英」、入門者用の「ジュニアアンカー英和・和英」、初級用の「アクセスア

ンカー英和」，中級用の「ニューヴィクトリーアンカー英和」，ビジネス英語も扱う「スーパーアンカー英和」，ジュニアアンカーの文字拡大版である「大人のためのアンカー英語学習辞典」である。これらの音声表記も，レベル毎に異なっており，シリーズとしての統一性よりも，レベルを意識した音声表記法を採用している。

3.2. 表記上の差違

先ず，発音記号がどのような記号によって括られているか，強勢記号やその位置を調べたのが表1である。

表1. 記号区分・強勢の差違

| 辞書レベル | 記号区分        | 強 勢             | 強勢記号表示位置 |
|-------|-------------|-----------------|----------|
| 入門    | [   ]       | ‘第1強勢   `第2強勢   | 母音の上     |
| 初級    | /   / [   ] | ‘第1強勢   `第2強勢   | 母音の上     |
| 中級    | /   / [   ] | ‘第1強勢   `第2強勢   | 母音の上     |
| 上級    | /   /       | ‘第1強勢   `第2強勢   | 母音の上     |
| 英英    | /   /       | ! 第1強勢     第2強勢 | 音節前      |

記号区分で，[   ] (square brackets)は下のレベルで主に用いられ，レベルが上がるに連れて slash /   /へと変化している。square brackets は，実際の言語音や発音を記録する際に用いられる記号である為，辞書の表記には馴染まない。一方，/   / (slash)は音韻・音素を表記する際に用いられることから，辞書ではこちらの記号の使用が妥当であると言えよう。

次に，強勢記号であるが，日本の英和辞典はすべて第1強勢(primary stress)を右上から斜めに示す記号/   ‘，第2強勢(secondary stress)はその逆方向から斜めに降ろす記号/   `を使用しており，その位置は強勢の置かれる母音の上に付けられている。一方，英英辞典ではIPA方式に準拠しており，第1強勢は強勢の置かれる音節の直前で，やや上に付けられており，第2強勢は同様に強勢の置かれる音節の直前で，やや下寄りに付けられており，こちらが世界標準の記号である。したがって，斜めに降ろす記号は，日本の辞書独特のルールということになる。音節の前に記号を付ける世界標準の方式は，音節の概念を理解するには適しており，強勢が母音だけに付いているのは，音節を無視していることになる。長い間慣れ親しんできた表記を変更することには，影響の範囲を考慮すると簡単ではないが，発音教育の観点からは，いずれ世界標準の方式に変更すべき時期が来ると思われる。なお，アメリカ英語の辞書では，日本式の斜めに降ろす第1強勢の記号が使用されており，第1と第2を太さの違いで表記し，逆方向の記号、即ち，日本の第2強勢の記号は採用していない。

強勢記号の表記例 education :   ɛdʒəkɛɪʃən   (英和)            |edʒəˈkeɪʃən   (英英)

発音記号に関しては，入門・初級用辞書はカナ表記と発音記号の併記である。しかし，解説の音声学用語に不統一や混在が見られ，学習者を混乱させている。それをまとめたのが表2である。

表2. 用語の混在(数)

| 辞書の分類 | アクセント | 強 勢 | ストレス | 混 在                            |
|-------|-------|-----|------|--------------------------------|
| 入 門   | 6     |     |      | 1 強勢 (ストレス)                    |
| 初 級   | 1     |     |      | 1 強勢 (ストレス)                    |
| 中 級   | 2     |     |      | 3 強勢 (アクセント) ,<br>強勢・アクセントストレス |
| 上 級   | 2     | 1   |      |                                |

辞書では、「アクセント」という用語が圧倒的に多く用いられているが、用語の混在する問題としては、表2に示した通り、「強勢 (アクセント)」、「強勢 (ストレス)」などが見られた。本来、アクセントとは、語のある部分を目立たせることであり、英語の場合は強勢によるアクセント(stress accent)と言える。一方、日本語では高さによるアクセント(pitch accent)が用いられている。日本語には「強さ」という概念が存在しないことから、「強勢」という用語が馴染みにくいという考えが反映している可能性はある。教育現場においても、中高の英語教員の大半が「アクセント」という用語を授業では用いている。また、大学入試センター試験の問題においても、「アクセント」という用語で出題されている。

次に、同じ音を表記するのに、辞書によって差が生じ易い母音をまとめたのが、表3～5である。表3では、例として bird に含まれる母音部分を示した。

/ɪ/の音色を持つ曖昧母音では、入門用が/əɪ/で統一されており、初級では上付き r/ という特殊な表記が見られた。また、入門・初級用ではカナが併記されている。一方、中・上級用では/əɪ/と/ə:/ (hooked schwa)に分かれた。因みに、英英辞典ではIPA方式を採用しているので、異なる記号/ɜ:/が用いられている。

表3. 母音表記1

| レベル | <u>bird</u> | 数 |
|-----|-------------|---|
| 入 門 | əɪ          | 8 |
| 初 級 | əɪ          | 1 |
|     | ər          | 1 |
| 中 級 | əɪ          | 3 |
|     | ə:          | 2 |
| 上 級 | əɪ          | 2 |
|     | ə:          | 1 |
| 英 英 | ɜ:          | 3 |

緊張母音(tense vowel)と弛緩母音(lax vowel)を持つ/i/と/u/では、特に様々な記号が存在している。先ず、表4の/i/では、緊張母音に関しては、すべての辞書が同じ記号/i:/を使用しているが、弛緩母音は/i/と/ɪ/の2種類があった。さらに、長音符号を外した/i/を含む3種類に分類している辞書もある。例として、sea, happy, hit に含まれる前舌高母

音を例示した。

表4. 母音表記2 前舌高母音

| レベル | 辞書名 | 出版社     | sea | happy | hit |
|-----|-----|---------|-----|-------|-----|
| 初級  | BG  | 大修館     | i:  |       | I   |
| 初級  | AC  | 三省堂     | i:  |       | i   |
| 中級  | SA  | 学研      | i:  | i     | I   |
| 中級  | LH  | 研究社     | i:  | i     | I   |
| 上級  | G   | 大修館     | i:  | i     | I   |
| 上級  | O   | 旺文社     | i:  | i     | I   |
| 上級  | P   | 小学館     | i:  |       | i   |
| 英英  | L   | Pearson | i:  | i     | I   |

表5では school に含まれる緊張母音/u:/と book に含まれる弛緩母音、さらには/i/と同様に長音符号を外した/u/もあり、組み合わせは表5から4通りあることが判明した。母音/i/よりも複雑化していることが分かる。特に、弛緩母音には/u/, /u/, /u/の3通りの表記が存在している。表中の数字は、各レベルで幾つの辞書がこれに該当するかを示している。

表5. 母音表記3 後舌高母音

|    | u o u: | u u u: | u u: | u u: |
|----|--------|--------|------|------|
| 入門 |        | 1      | 7    |      |
| 初級 |        |        | 1    | 1    |
| 中級 | 1      | 1      | 3    |      |
| 上級 |        | 2      | 1    |      |
| 英英 | 2      |        | 1    |      |

さらに、入門・初級用で多く見られるカナ表記についてまとめたのが、表6である。カナ表記は、辞書によって実に多彩である。appleに含まれる前舌低母音である/æ/は、7通りもある。唇歯摩擦音の/f/では、10種類すべてが異なるカナ表記になっている。有声子音の/v/も6通りある。また、同じ出版社の辞書でも、表の両端に示したJCとACでは表記が異なっており、統一性が欠如している。f/vをひらかなとカタカナで使い分けるルールにも、何らかの説明が必要であるが、使用する学習者は、そのまま日本語としてフブを用いることが推測できる。

入門・初級用辞書を使用する児童・生徒が、これらの音声表記を見て、どのような発音をするのかを想像すると、学習者への悪影響が懸念される。発音記号を知らないのに、単なる発音の目安といった程度で付されているのかもしれないが、あまりにも懲りすぎたカナ表記は、害が大きいと言えよう。



表6. 母音のカナ表記

| 辞書    | JC                              | NH                              | JA                              | P                             | H                              | C                               | MS                              | S                               | BG                             | AC                             |
|-------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 出版社   | 三省堂                             | 東京書籍                            | 学研                              | 小学館                           | 講談社                            | Benesse                         | 旺文社                             | 開隆堂                             | 大修館                            | 三省堂                            |
| apple | ア <sup>プ</sup> ル                | あ <sup>ぷ</sup> る                | ア <sup>プ</sup> ル                | ア <sup>プ</sup> ル              | ア <sup>プ</sup> ル               | あー <sup>ぷ</sup> る               | ア <sup>プ</sup> る                | エ <sup>ア</sup> ブ <sup>ウ</sup>   | ア <sup>プ</sup> ル               | ア <sup>プ</sup> ル               |
| first | ふ <sup>ア</sup> へ <sup>ス</sup> ト | ふ <sup>ア</sup> へ <sup>ス</sup> ト | フ <sup>ア</sup> へ <sup>ス</sup> ト | フ <sup>ア</sup> ス <sup>ト</sup> | フ <sup>ア</sup> ース <sup>ト</sup> | ふ <sup>あ</sup> へ <sup>ス</sup> ト | ふ <sup>ア</sup> へ <sup>ス</sup> ト | ウ <sup>ア</sup> へ <sup>ス</sup> ト | フ <sup>ア</sup> ース <sup>ト</sup> | フ <sup>ア</sup> ース <sup>ト</sup> |
| five  | ふ <sup>アイ</sup> ヴ               | ふ <sup>アイ</sup> ヴ               | フ <sup>アイ</sup> ヴ               | フ <sup>アイ</sup> ヴ             | フ <sup>アイ</sup> ヴ              | ふ <sup>アイ</sup> ぶ               | ふ <sup>アイ</sup> ヴ               | ウ <sup>アイ</sup> ヴ               | フ <sup>アイ</sup> ヴ              | フ <sup>アイ</sup> ヴ              |

他にも、幾つか特徴的な差違を発見することができた。

#### 1) 二重母音の分類は辞書によって異なる

例えば, near に含まれる二重母音の表記では, /ɪə/, /ɪəR/, /ɪər/, /ɪə/, /ɪər/, /ɪə/ など6種類が見られる。これは, アメリカ英語に特徴的な /r/ の音色を持つ母音の表記において, 多様な記述が見られ, 他の /r/ の音色を含む二重母音においても, 同様の傾向が散見された。

#### 2) 子音の表記には大きな差違は見られない

ただし, 外来語の音声表記では, 辞書によってその有無に差があった。例えば, ドイツ語の Bach では無声軟口蓋摩擦音 /x/ を, Köchel で無声硬口蓋摩擦音 /ç/ を扱う辞書と扱わない辞書があるということである。また, /ts/, /dz/ を破擦音として扱うかどうか, 辞書によって異なっている。例えば cats, cards などの語末子音の扱いが, これに相当する。また, 音節主音の子音に対して補助記号を付けるかどうかでは, 上級用にのみ見られた。例えば, happen の /n/ の表示などである。

## IV 考察

以上, レベルの異なる辞書を比較しながら, 音声表記の差違について分析してみると, カナ表記においても発音記号においても, なぜこのような差違が生じるのかという疑問を抱くことになる。

辞書の編纂には, 編集主幹と呼ばれる人物が中心となって, 様々な英語学分野の研究者が協力して作業を進めている。編集主幹は主に, 文法や語法研究者が多いことから, 辞書の音声表記に関しては音声学を専門とする人が必ず参加している。この音声学者の考え方が, 辞書の音声表記の方針を決定しており, 結果的に音声表記法に反映されることになる。上記で指摘した通り, 表記が異なるのはこれが主な原因である。

一方で, 辞書の利用者は英語の学習者であるが, 辞書編纂者が辞書の利用者の事情をどこまで考慮して作成しているのかは, 極めて疑問である。例えば, 初級用の辞書は発音記号を学んでいないので, カナ表記を加えるという方針であったり, 中学高校生用の辞書では, 教科書がどのような発音記号を使用しているのかを知らずに, 辞書の記号を決めたりしていることがある。結果として, 教科書と使用している辞書の音声表記が異なることがあり, 生徒の中に混乱が生じることもある。英語学習に関わる教科書, 参考書, 辞書などは, 少なくとも同一の出版社であれば, この点には配慮が必要であると考えられる。

その一例として, 改訂版を作る際に音声表記の担当者が変わると, 表記の方針も変わったということがあった。それをまとめたのが, 表7である。



表 7. 版による差違の例

| G4                              | G5  |
|---------------------------------|---|
| /i:/ sea, <u>pie</u> ce         | /i:/ <u>se</u> a, <u>pie</u> ce                       |
|                                 | /i/ happy, <u>re</u> act                              |
| /ɪ/ <u>hi</u> t, <u>pi</u> ck   | /ɪ/ <u>hi</u> t, <u>pi</u> ck                         |
| /ʌ/ <u>h</u> ot, <u>w</u> atch  | /ɑ:   ɔ/ <u>h</u> ot, <u>r</u> ob                     |
| /u/ <u>bo</u> ok, <u>w</u> ould | /u/ <u>bo</u> ok, <u>w</u> ould                       |
|                                 | /u/ <u>ma</u> n <u>u</u> al, <u>t</u> u <u>i</u> tion |
| /u:/ <u>so</u> up, <u>fo</u> od | /u:/ <u>so</u> up, <u>fo</u> od                       |

更に、同じ系列の中辞典（＝学習辞典）と大辞典（専門家用）とは、表記が異なっている。表 8 では、その対比を示している。この 2 種類では、使用者のレベルが異なるので、当然の結果として、後者は専門的な音声学の知識があるという前提で編纂されている。なお、縦線（|）は米英の差を区別する際に用いる記号である。なお、表中の /r/ が斜体になっているのは、アメリカ英語の場合 r の音色が入り、イギリス英語では省かれることを意味している。誤解を生みやすいのは、schwa/ə/の後に /r/ が付けられていると、2 つの音が連続しているように見えるが、厳密には hooked schwa /ə̃ r/ という 1 つの母音である。

表 8. 中辞典と大辞典の差違 schwa/ə/と hooked schwa/ə̃ r/

| 中辞典  | 大辞典  |
|--|--|
| /ə r/ <u>pa</u> per, <u>si</u> ster                    | /ə̃ r/ <u>pa</u> per, <u>pe</u> rform                  |
| /ə̃ r/ <u>bi</u> rd, <u>ea</u> rly                     | /ə̃ r/ <u>bi</u> rd, <u>ea</u> rly                     |
| /ə̃ r   ʌ r/ <u>co</u> urage, <u>cu</u> rr <u>en</u> t | /ə̃ r   ʌ r/ <u>co</u> urage, <u>cu</u> rr <u>en</u> t |

従来の日本で出版された英和辞典の多くは、Jones 式を踏襲した音量表記であり、/i: i/, /u: u/, /ɔ: ɔ/ のように、同じ記号に長音符号を付けていた。これでは音質の差違を表記することはできていなかった。即ち、学習者に長母音と短母音では音質が異なるという前提を無視して、長さの違いであるという誤解を与え続けてきたのである。それらを是正したのが表 7 にまとめた記号体系となっている（南條 2015）。

## V まとめ

### 5.1. 問題点

英語学習者は、辞書の音声表記に関して、以下の通り問題点を抱えている。

- 1) 辞書の音声表記や音声学用語の不統一は、学習者に混乱を与えている。
- 2) 入門用辞書と中学校の教科書、初級辞書と高校の教科書など、同じ出版社の教科書と辞書を比較しても対応していない。

- 3) 辞書や教科書が変わると、音声表記の体系が変わるので、学習者は発音記号のルールを覚え直す必要がある。あまりに個性的な音声表記を考案することが、学習者にとって発音学習の障害になっていることを、辞書編纂者は配慮すべきである。
- 4) 中学高校で発音記号を十分に学んでおらず、新出単語に発音記号が添えられていても、学習者は発音記号の学習を諦めている可能性がある。
- 5) 授業で補い、指導するのが理想であるが、辞書指導に時間を多くかけることが実際にはできていない。実際の授業ではすべきことが多く、十分な時間を割くことは難しいので、せめて発音指導の充実が望まれる。
- 6) 発音が分からない場合、電子辞書の音声を聞くが、曖昧な音は聞いても分からない。また、提示してある発音記号も読めない（＝音声化できない）。電子辞書の音声は合成音なので、参考にはなるが、単なるサンプルでしかない。しかも、単語のみの発音提示なので、文単位での再生機能が求められる。

## 5.2. 対応

- 1) すべての辞書が音声表記を統一する必要はないが、辞書編纂者や辞書に携わる音声学者は、辞書を使用する学習者の知識や英語教育の実情を考慮すべきである。
- 2) 教科書とそれに対応する辞書の音声表記は、学習者目線から、差違を小さくする。あるいは、両者の関連性を持たせることが望ましい。
- 3) 中学生は辞書をあまり使用しておらず、巻末の語彙リストで十分である。一方、高校生を対象にした学習辞典こそ、中学からのつながりを考慮した編纂が求められる。音声学者の主張や方針を押しつけるのではなく、学習者や教員の実情をもっと意識して音声表記を決定すべきである。また、辞書部門と教科書部門という出版社内部での連携強化が求められる。
- 4) 英語の授業で、辞書指導・発音記号の読み方に、もう少し時間を割くべきである。そのためには、体系的に指導するという観点から、何を・いつ・どれだけといった、授業時間毎、学期や年間の指導計画が必要になる。これは、Can-Do リスト作成の基本的な考え方に通じる。
- 5) 教師用指導書、教科書ガイド、英語音声学の解説書などで、表記法の大きな差違があり、教員も授業準備や実施において困ることが多い。拠り所となる音声表記を、できれば学習指導要領で提示すべきであろう。あるいは、学校や学年で英語科教員が統一した見解を共有すべきである。
- 6) 英語科教員の問題については、河内山他(2015)で原因を究明しており、解決の糸口としては、大学における教職課程において英語音声学などの必修化や発音指導法の充実を提案し、現職の英語科教員に対しては、研修プログラムを構築しており、普及と実施が待たれる(有本 2015)。また、小学校から英語が必修化されることを考慮すると、音声教育はその基盤として重要な位置を占めており、ないがしろにすべきではない。

## 5.3. 今後の展開

本稿では辞書の音声表記を比較したが、すべての辞書を網羅したわけではない。3章で述べたように、様々な辞書が出版されているため、さらに対象を増やす必要がある。また、入門・初級・中級・上級と4つに分類したが、中級については幅が広いので、分類についても再考が必要である。この他に、紙辞書や電子辞書以外にも、高校・大学生が使用しているオンライン辞書へ拡大して調査する必要がある。また、発音記号の活用、電子辞書の音声の利用など、

辞書の使い方などの実態調査も今後は行う予定である。既に中学校は調査済みだが、高校の教科書で発音記号がどのように扱われているのか、発音記号の読み方を含めた辞書指導の具体的な内容や方法についても調査を継続したい。

コミュニケーション能力育成の為に、辞書の使用をなくして訳読を止めようという考え方を文部科学省が最近示しており、辞書使用の意味を取り違えているようであるが、この問題については、稿を改めて議論したい。

## 謝辞

本研究は、2018年8月に外国語教育メディア学会 第58回全国研究大会（千里ライフサイエンスセンター）で行った研究発表を加筆修正したものである。また、本研究は科学研究費助成金（基盤C一般：課題番号16K62869）の助成を受けている。

## 引用・参考文献

- 有本 純（編）（2015）『教職課程および現職研修における英語発音教育プログラムの開発』科学研究助成金報告書（基盤C一般 23520729）
- 岩井茂昭（2006）「英語学習における単母音の音声表記の異同」『生駒経済論叢』4-1, 31-59.
- 河内山真理, 有本 純（2017）「中学校用教科書ガイドにおける発音表記の扱い」『関西国際大学教育総合研究叢書』10, 131-139.
- 河内山真理, 有本 純（2018）「発音指導と発音記号：辞書使用の諸問題」『外国語教育メディア学会第58回全国研究大会予稿集』76-77.
- Koyama, T. (2013) Enhancing Learners' E-dictionary Skills through Strategy Training. *Selected papers from the 8th ASIALEX International Conference*. 177-178.
- 小山敏子(2014)「中学生の英語辞書使用の実態調査」『大阪大谷大学紀要』48, 23-31.
- 南條健介（2015）「イギリス発音の/b/の記号について」『英語教育』7月号, 16-17.
- Tono, Y. (2006) English Bilingual Lexicography in Japan: Meeting Serious Challenges. In S. Ishikawa, K. Minamido, M. Murata, & Y. Tono (eds.), *English Lexicography in Japan*. 18-25.

## 附録：分析に用いた辞書一覧

各辞書は、既に改訂版が出ているが、調査で使用した時点での版を掲載している。出版年の右肩の数字は版を示している。

### 1. 入門用

- ・サンシャイン英和辞典（2015<sup>4</sup>）開隆堂
- ・プログレッシブ中学英和辞典（2014）小学館
- ・マイスタディ英和辞典（2011）旺文社
- ・ジュニアアンカー英和辞典（2013）学研
- ・ニューホライズン英和辞典（2011<sup>7</sup>）東京書籍
- ・ハウディ英和辞典（2011<sup>4</sup>）講談社

- ・初級クラウン英和辞典 (2012<sup>12</sup>) 三省堂
- ・チャレンジ中学英和・和英辞典 (2012) ベネッセ

## 2. 初級用

- ・ベーシックジーニアス英和辞典 (2017<sup>2</sup>) 大修館書店
- ・エースクラウン英和辞典 (2015<sup>2</sup>) 三省堂

## 3. 中級用

- ・スーパーアンカー英和辞典 (2017<sup>5</sup>) 学研
- ・フェイバリット英和辞典 (2014<sup>3</sup>) 東京書籍
- ・ライトハウス英和辞典 (2017<sup>6</sup>) 研究社
- ・オーレックス英和辞典 (2016<sup>2</sup>) 旺文社
- ・ジーニアス英和辞典 (2017<sup>5</sup>) 大修館書店

## 4. 上級用

- ・ウィズダム英和辞典 (2012<sup>3</sup>) 三省堂
- ・研究社英和中辞典 (2016<sup>7</sup>) 研究社
- ・プログレッシブ英和辞典 (2012<sup>5</sup>) 小学館

## 5. 英英辞典

- ・Cambridge Learner's Dictionary (2004<sup>2</sup>) Cambridge University Press
- ・Longman Dictionary of Contemporary English (2010<sup>5</sup>) Pearson Education
- ・Oxford Student's Dictionary (2012<sup>3</sup>) Oxford University Press

## Abstract

The purpose of this study is to investigate how pronunciation teaching in schools is conducted using dictionaries, especially focusing on phonetic symbols. According to the Course of Study by MEXT, it is necessary to teach how to use a dictionary and make students utilize it. We classified dictionaries into five types, i.e., 1) introductory English-Japanese, 2) elementary E-J, 3) intermediate E-J, 4) advanced E-J and 5) English learner's dictionary (E-E). As a result, there are many differences in the phonetic descriptions among these dictionaries, such as stress marks, technical terms, vowels, and *kana* descriptions.

Lexicographers should take it into consideration that phoneticians who are in charge of the dictionary must understand the users of the dictionary and decide most suitable phonetic descriptions because Japanese learners of English are confused by the different descriptions. Also, teachers should pay attention to the pronunciation teaching for students to acquire better communication skills.